

# To 不定詞の本質 (その2)

——英仏比較文法の試み——

柏岡 珠子・杉浦 茂夫

承 前

本論文の(その1)では、主として歴史的な観点から、英語の to 不定詞の発達を考察した。

不定詞標識の to は、「方向」を表わす前置詞 to から発達したものであるとされるが、そうであれば to 不定詞の諸用法のうち、前置詞 to の意味の濃い用法ほど古くから使われていたはずであると仮定して、*OED* の用例により検証を試みた。そして、名詞的用法のように、「方向」の意味から遠いように思われる用法も、古期英語の統語法を考慮に入れるならば、すなわち、「主語」、「目的語」などの文法範疇を現代英語のそれとは少し違った観点から捕えるならば、「方向指定」の用法として理解できることを見た。

次に、英語の歴史のなかで、to 不定詞の用法が拡大して、原形不定詞の領域へ侵入していった背景には、英語の不定詞が、直説法現在形(3人称単数を主語とする場合を除く)、命令形などと語形上の区別を無くしてしまったという事実が存在すると考え、「言語には明確な範疇標識を要求する力が作用する」という仮説をたてて、2・3の現象を検討した。しかし、この仮説をもっと深く考察するためには、不定詞が語形上の区別を残している他の言語についても探求を拡げる必要があると思われる。そこで、この論文の(その2)では、**3.1**でフランス語の不定詞の用法を概観し、**3.2**で、そこからどのような原則が引き出せるかを考えてみようと思うのである。

以下では、(その1)の1に掲げた英語の to 不定詞の用例(主として *OED* による)の翻訳を出発点として、フランス語の不定詞の用法を概観し、いろいろな問題を探究したいと思う。便宜のために、以下に英語の用例を再録する。

#### I. 副詞的關係にある不定詞とともに

##### \* 目的あるいは意図を示す

##### 1. 動詞・形容詞・名詞に依存して

She ran to meet her father.

Are they quite good to eat?

The time to learn is when you're young.

##### 2. 絶対・独立構文において

All their ins and outs (to use an American phrase)

##### \*\*目的性 (objectivity) を示す

##### 3. 動詞に依存して、弱い目的の意味をもつ

I strive to be concise.

##### 4. 形容詞に依存して、その形容詞の適用範囲を示す

I am ready to go.

##### 5. 抽象名詞に依存して、その目的や適用範囲を示す

I had the honour to be a member of it.

##### \*\*\*取り決め (appointment) あるいは用途 (destination) を示す

##### 6. 運命 (destiny) あるいは出来事や成り行き (outcome) を示す

When we two parted... To sever for years.

##### \*\*\*\*結果を示す。

##### 7. 結果・成り行き (consequence) を表わす

This tea is too hot to drink.

##### \*\*\*\*根拠 (occasion) あるいは条件を示す

##### 8. 根拠を示して

I am glad to see you here. (J. p. 259)

9. 受動的に（主要名詞が含意される目的語となる）

You are a fair woman to look upon.（現代綴字に改変）

10. 主節の陳述の根拠となる事実・想定を表わす

To hear you, people might think you were the mistress. (J. p. 262)

II. 形容詞的關係にある不定詞とともに

11. be 動詞の述部として、あるいは直接名詞を修飾して、名詞に対して形容詞的關係にある不定詞とともに。（この項の下位区分は複雑である。a. 意図・取り決め, b. 義務・必要, c. 可能性・起こりうる行為, d. 性質・特徴と意味区分され, さらに, 不定詞の態や前置詞の有無によって下位区分されている。ここでは, いわゆる「be-to 構文」は省き, 名詞を直接修飾する用例のみを示す。）

I have much to tell. (a)

I have a song to sing. (b)

There is no one to see us (c)

She was not the woman to misbehave towards her betters. (d)

12. 直説法の関係節に等価な不定詞とともに

He was the last to appear.

III. 名詞的關係にある不定詞とともに

名詞または動名詞と等価である : to は, 結局, 自らの意味はもたずに不定詞の単なる「印」となっている。

13. it に導かれて, 主語・目的語となっている不定詞とともに

'Tis better to have loved and lost / Than never to have loved at all.

直接の主語・述語となっている不定詞とともに

To err is human, to forgive, divine.

Talking is not always to converse.

14. 他動詞の直接目的語となっている不定詞とともに

He fear'd to die, yet felt ashamed to live.

She wants to speak to you.

以上の分類が問題点を含むものであることは（その1）で指摘したが、それらの問題点を追求することは避けて、論究の出発点として利用することにした。

執筆の分担は、3.1 フランス語の不定詞は柏岡珠子、承前と3.2は杉浦茂夫である。論考を進めるに際して、柏岡氏から提出された資料を杉浦が点検し、本稿の趣旨に関係のある事項に限定して、構成の首尾一貫性を図ったことをお断りしておく。その際、各言語の文法記述には独特の用語がある（たとえば、フランス語の属詞、状況補語など）ことが問題となったが、無理に統一することはしなかった。

### 3.1 フランス語の不定詞

フランス語において英語の to 不定詞に対応するものは、ときに前置詞を伴い、ときに前置詞を伴わない不定詞である。また不定詞の前には à, de, pour その他さまざまな前置詞や前置詞句が現れるうえ、それが本来の意味を担っている場合、形式的な場合とさまざまである。以下では、比較研究の準備段階として、3.1.1で英語例文のフランス語訳を示し、3.1.2～6ではとくに前置詞の用法に注目しながら、いくつかの文法書の記述を杉浦氏の分類に従ってまとめてみる。例文の出典は（ ）内に書名の略号（p.20の参考文献一覧参照）とページ数で示す。

#### 3.1.1 英語例文のフランス語訳

1. Elle a couru (**pour**) *rejoindre* son père.<sup>1)</sup>

Ils sont bons **à manger**?

Le moment **d'apprendre**, c'est quand vous êtes jeune.

2. **A utiliser** une expression américaine, "all their ins and outs".

3. J'essaie **d'être** concis.
4. Je suis prêt **à partir**.<sup>2)</sup>  
Je suis près **de partir**.<sup>3)</sup>
5. J'ai eu l'honneur **d'en être** membre.
6. Lorsque nous nous étions quittés, **pour** ne plus *nous revoir* pendant des années...
7. Ce thé est trop chaud **pour être bu**.  
?Ce thé est trop chaud **à boire**.<sup>4)</sup>
8. Je suis ravie **de vous voir** ici.
9. Vous êtes une jolie femme **à voir**.
10. **A vous entendre**, on croirait que vous étiez la maîtresse.
11. a) J'ai beaucoup **à vous raconter/dire**.  
b) J'ai une chanson **à chanter**.  
c) Il n'y a personne **pour nous voir**.<sup>5)</sup>  
Personne ne veut nous *voir*. /Personne ne consent **à nous voir**.<sup>6)</sup>  
d) Ce n'était pas une femme **à se mal conduire** envers ses aînés.
12. Il a été le dernier **à se montrer**.
13. Il vaut mieux *avoir aimé* et *perdre* que **de n'avoir** jamais *aimé*.  
*Errer* est humain, *pardonner* divin.  
*Parler* n'est pas toujours *converser*.

---

1) *pour* がある場合は *rejoindre* を目的として *courir* したことを, *pour* がない場合は *rejoindre son père* が *courir* の直後に起こったことを表わす。

2) 「出発する準備ができている」の意味で出発直前に言う。

3) 「出発に近い, そろそろ出発だ」の意味でたとえば出発の前日, 数時間前に言う。

4) *chaud* は本来は補語をとらない形容詞だが, *facile à lire* (読みやすい), *beau à voir* (見た目に美しい) などからの類推で使われることがある。

5) このフランス文には2つの解釈が可能である。

1. 迎えてくれる人がいない。2. 誰にも見られる恐れはない。

6) 「誰も私たちに会いたがらない」の意味ではこの2つの訳が可能になる。

14. Il avait peur **de mourir** mais avait aussi honte **de survivre**.

Elle voudrait vous *parler*. /Elle souhaite vous *parler*.

### 3. 1. 2 副詞的用法

副詞的用法の不定詞は前置詞 *pour*, *à*, *de* によって導かれることが多い。これは例文1～10からも明らかであるが、さらに多くの例を検討したい。

1) 目的: **pour**+不定詞, **afin de**+不定詞で表されることが多い。

- 運動を示す動詞のあとでは、ふつう前置詞なしの不定詞が目的を示す。

例 *aller* 行く, *courir* 走る, *descendre* 降りる, *partir* 出発する,

*passer* 通る, *rentrer* 帰る, *revenir* 戻る, *venir* 来る

これらの動詞は多くの場合 *pour* を伴っても同じように目的を表すことができる。

Je rentre (**pour**) *travailler*. 私は仕事をしに帰る。(G 1335)

- <**pour**+不定詞>によって特殊なニュアンスが生じる場合がある。

Je suis allé le *voir*. 私は彼に会いに行った。(目的は達成された)

Je suis allé **pour** le *voir*. 私は彼に会うために行ったのだ。(目的が達成されたかどうかは不明) (LB 476)

- *envoyer* (送る) は、その直接目的語が不定詞の主語であれば、前置詞なしでも目的を表せるが、そうでない場合は *pour* が必要になる。

J'envoyai mon fils au-devant de lui (**pour**) *l'assurer*.

私は彼を安心させてくるようにと息子を彼のもとにやった。

(*assurer* の主語は *mon fils*)

J'envoyai mon fils au-devant de lui **pour** *l'empêcher* de venir.

私は彼が来るのを阻もうと、息子を彼のもとにやった。

(*empêcher* の主語は *je*) (G 1335)

- *pour* がつけられない場合もある。*être* が *aller* の意味で使われた場合がその例である。

J'ai été le *trouver*. 私は彼を見つけに行った。(G 1335)

- Le Bidois によると, pour が不可欠な動詞もある。

(Quand) je me levai **pour faire** signe au grand Meaulnes, il ne m'aperçut pas d'abord.

私はグラン・モーヌに合図をするために立ち上がったが、彼は初め私に気づかなかった。(LB 476)

ただしこれは se lever という動詞の性質によると考えられる。前置詞なしの不定詞が目的を示すのは、運動を示す動詞のなかでも移動を示す動詞に限定されると言ったほうがよさそうである。

- 運動を示す動詞のあとにくる目的が否定の場合は、不定詞の前に pour などの前置詞(句)が必要である。

Nous sommes revenus par le chemin de Saint-Malo, **pour** ne pas le *recontrer*.

私たちは彼に会わないように、サンマロ街道を通過して帰った。(LB 476)

- avoir は <à+不定詞> を従えて成句を作る。

Vous n'avez pas **à payer**. あなたは払う必要はない。(P 2)

- rester は移動動詞のひとつと考えられるが、前置詞なし、あるいはàを伴って目的を表す。

Restez **à dîner** avec nous. 夕食を食べていってください。

Reste *déjeuner* avec nous. 昼食を食べて行きなさい。(G 1334)

## 2) 運命, 継起: <pour+不定詞>

- 目的の表現に似ているが、単に時間的前後関係を示すにすぎない場合が多い。

Une mouche éphémère naît à neuf heures du matin... **pour mourir** à cinq heures du soir.

カゲロウは朝の9時に生まれて夕方5時に死ぬ。(LB 477)

## 3) 原因, 根拠: <de+不定詞>, <à+不定詞>, <pour+不定詞>

- de は起源を表す前置詞であることから、因果関係の表現に適しており、古典フランス語では <de+不定詞> が多用された。この構成は現在でも見られ

るが、感情や判断を表す動詞の根拠を示す場合に限られる。(LB 695)

Et, **de me sentir** seul, j'éprouvais une étrange crainte.

そして、ひとりだと感じると、私は奇妙な恐怖に襲われた。(LB 448)

Je la plains **d'avoir** un tel fils.

あんな息子を持って彼女は気の毒だ。(P 1420)

- 感情を表す形容詞の根拠を示すには<**de**+不定詞>が使われる。

例 fier 誇らしい, heureux 幸せな, ravi 大喜びの, honteux 恥入った,  
désolé 困惑した, déçu がっかりした

Je suis désolé **de** vous *avoir fait* attendre.

お待たせして申し訳ありません。

- <**à**+不定詞>も原因を表す。

Il s'est rendu malade **à travailler** trop.

彼は働きすぎて病気になった。(P 3)

- <**pour**+不定詞>は目的を表すことが多いが、原因を示すこともある。  
ただし、現在では不定詞が過去形の場合しか使われない。

Il a été félicité **pour avoir sauvé** un enfant.

彼は子供を救助したことで称賛された。(P 1467)

4) 結果, 程度, 到達点: <**à**+不定詞>, <**de façon à/ jusqu'à/ au point de**+不定詞>, <**pour**+不定詞>

- à** はもともと到達点を表す前置詞であり、事柄の到達点すなわち結果を表すのにふさわしい。<**au point de**+不定詞>も**à**を含む表現である。<**à**+不定詞>は極限点を示し、動詞の度合いを強めるのに用いられる。(LB 481, 685)

On s'est ennuyé **à mourir** pendant toute la soirée.

パーティの間ずっと、みんなは死ぬほど退屈した。(前39)

- 「あまりに～なので...」, 「十分～なので...」は <trop/assez...**pour**+不定詞>で表す。trop/assez... によって不定詞の示す事柄が実現するための条件が整っているかどうかを示され、**pour** はここでも目的を表す。『P



ワイヤル仏和中辞典』では因果関係を示すとされている。

Il y avait trop de monde **pour passer**.

人が多くて通り抜けられなかった。(前343)

5) 仮定：<de+不定詞>，<à+不定詞>

条件を表す<si+節>にあたり，主節は条件法。(LB 516, 684)

**A lire** ce livre, on penserait qu'il pourrait y avoir une suite.

この本を読むと，続きがありそうに思えるのだが。(前39)

例文10はこれに相当するが，「補言」の *pour* に対応するとも考えられる。

**pour prendre** un exemple, **pour** ne pas *entrer* dans le détail

例を1つあげると，細かい点には触れないでくと(口1467)

6) 対立：<pour+不定詞>，<à+不定詞>

主動詞が否定の場合は対立を示す。(LB517)

**Pour avoir passé** deux nuits sans sommeil, vous ne paraissez pas trop fatigué.

2晩眠らなかったにしては，さほど疲れたようすも見えませんか。

(ハ124)

**A discuter** avec lui, vous n'obtiendriez rien.

彼と議論してもどうにもならないでしょう。(口3)

7) 時：<à+不定詞>，<avant de+不定詞>，<après+不定詞>

●<à+不定詞>はジェロニディオフに近く，同時性のほか，方法，様態，原因も示す。(LB 412, 684)

**A le voir**, j'ai compris qu'il était inquiet de quelque chose.

彼の顔を見て，なにか心配ごとがあるのがわかった。(ハ124)

Elle passe des heures **à écouter** des disques.

彼女はレコードを聞いて何時間も過ごします。(口3)

Il a mis beaucoup de temps **à se décider**.

彼は心を決めるのにずいぶん時間がかかった。(前334)

●<avant de+不定詞>は主動詞が不定詞より時間的に先行することを表

す。17世紀までは <avant+不定詞> が使われた。<avant que de+不定詞> も多用されたが現在では古風な表現と感じられる。(LB426)

Il ne faut pas aller jouer dehors **avant d'avoir fini** tes devoirs.

宿題を終えてしまうまで外に遊びに行ってはいけない。(P150)

● 主動詞が不定詞より時間的に後であることは <après+不定詞> で表す。不定詞は、古くは現在形で使われたが、現在は少数の成句をのぞいて過去形のみ。同一主語であっても <après que+接続法> で表すことが多い。

(LB 432)

**Après avoir examiné** les papiers, il les a signés.

彼は書類を検討してから署名した。(P102)

**après boire ; après manger** 酒を飲んだ後で、食事の後で (P102)

8) 範囲, 限定: <à+不定詞>, <de+不定詞>, <pour+不定詞>

● <形容詞+à+不定詞> は形容詞の適用範囲を示す。

例 facile やさしい, difficile むずかしい, compliqué 複雑な, simple 単純な, commode 便利な; prêt 用意のできた, porté 傾向のある, bon よい, résolu 決心した; agréable 心地よい, amusant 楽しい, drôle おかしい, ennuyeux たいくつな

Le japonais est difficile **à bien prononcer**.

日本語はきちんと発音するのがむずかしい。

ただし、行為自体の難易を問題にする場合は de を使い、次のように言う。

C'est/Il est difficile **de bien prononcer** le japonais.

日本語をきちんと発音するのはむずかしい。(前53)

● <名詞+à+不定詞>

J'admire sa facilité **à apprendre** les langues.

彼が楽々と外国語をマスターするには感心してしまう。(前47)

● <形容詞+de+不定詞>

Je ne suis pas certain **d'avoir** bien répondu à votre question.

ご質問に対するお答えになったかどうかわかりません。(前187)

● <名詞+**de**+不定詞>

Il a eu la chance **d'avoir** Monsieur Charles comme professeur.

彼は運よくシャルル先生に教わることができた。(前182)

9) 様態 : <**sans**+不定詞>, <**par**+不定詞>

- **par** は commencer, finir などに先立ち, 行為の起点, 終点を示す。

Commençons **par** nettoyer le plancher.

まず床掃除から始めよう。(P1332)

Il est parti **sans** rien dire.

彼は何も言わずに行ってしまった。(前369)

### 3. 1. 3 形容詞的用法

例文11~12から, 形容詞的用法の to 不定詞には, <**à**+不定詞>, ときに <**pour**+不定詞> が対応することがわかる。このほか <**de**+不定詞> も見られる。名詞を直接修飾する不定詞には, 形容詞的用法とも副詞的用法とも考えられるものがある。

1) 属詞の機能 : <**à**+不定詞>, 前置詞なし

- 義務, 必要を表す。

Ce travail est **à** refaire. この仕事はやり直さなければならない。(P2)

- sembler, paraître のあとでは前置詞なし。

Le temps semble **s'améliorer**. 天気は回復しそうだ。(P1717)

2) 名詞の補語 : <**à**+不定詞>, <**de**+不定詞>, <**pour**+不定詞>

- 義務, 必要, 目的, 用途などを表す。合成語を作るものも多い。

J'ai une question **à** vous poser. あなたに1つ質問があります。(P2)

un mot **pour** rire, l'heure **de** partir, une machine **à** laver

冗談                                      出発の時刻                                      洗濯機

3) 関係節の機能 : <**à**+不定詞>, <疑問詞+不定詞>

- この構成では **à** は単に主節と不定詞をつなぐ役を果たす。(LB 686)

Nous sommes quatre à partager la proie.

われわれは4者で獲物を分けるのだ。(LB686)

Elle est la seule à nous avoir remerciés.

私たちに礼を言ったのは彼女だけだ。(ロ3)

- <疑問詞+不定詞>は多くの否定文で用いられ、可能性、目的 (pouvoir, devoir) の観念を含む。(LB494)

Il semblait chercher un témoin à **qui prouver** son honnêteté.

彼は自分の誠実さを証明できるような相手を探しているふうだった。

(ハ123)

Je ne sais **que faire**. どうしたらよいか判らない。(井178)

### 3. 1. 4 名詞的用法

1) 主語：前置詞なし、<de+不定詞>

- 一般的な事柄の場合は前置詞なし。

*Ecrire bien n'est pas à la portée de tout le monde.*

うまく書くということは誰にでもできることではありません。(ハ123)

- 個別の行為を指す場合は de を用いるが、不定詞を導入する役割を果たすのみで、意味は持たない。(G1337, 井175)

**De t'avoir parlé** m'a fait du bien.

君に話したことは私の気分をすっきりさせた。(LB 687)

- 比較の que のあとでは de はあってもなくてもよいが、比較の第1項が示されていない場合は不可欠。

(Il) n'eut pas demandé mieux **que de vivre**.

彼は生きていられさえすればと願っただろう。(LB 688)

2) 真主語：<de+不定詞>, 前置詞なし, <à+不定詞>

- 不定詞を主題にとる表現は <c'est... de+不定詞>が最も一般的である。  
(井175)

C'est dommage **de laisser** ce plat. この料理を残すのはもったいない。

(ロ489)

Il m'est difficile d'en parler. それは話しにくいことだ。(井175)

- il faut, il vaut mieux, mieux vaut autant などの構文は前置詞をとらない。

Il faut **commencer** tout de suite. すぐ始めるべきだ。(ハ123)

- àをとるのは限られた構文のみ。(井175)

Il reste à prendre un pari. あとは決心さえすればよい。(井175)

C'est à vous à(de) jouer. あなたの番だ。(LB 701)

### 3) 属詞：前置詞なし，<de+不定詞>

- 主語自体が不定詞のことが多い。

Dire «je vous aime» n'est pas nécessairement aimer.

『愛しています』と言うことは必ずしも愛することではない。(ハ123)

- 主語を c'est で受け直すことが多い。

Partir, c'est mourir un peu. 出立は死に通ずる。(井175)

- de を伴う例。

Son désir était de bien faire. 彼の望みは上手にやることだ。(B232)

4) 直接目的語：主動詞の種類にしたがって3つの場合がある。名詞を直接目的語として前置詞を介さずにとる動詞も、不定詞には前置詞を要することが多い。

#### a) 前置詞なしの不定詞 (G1321-1323)

- 心情，知的作用を示す動詞が多い：aimer 好む，compter ～するつもりでいる，croire 信じる，désirer 欲する，détester 嫌う，espérer 期待する，oser あえてする，penser 考える，savoir 知っている

Je préfère rester ici. 私はここにいたほうがいい。(井175)

- 叙法を示す半助動詞：devoir ～しなければならない，pouvoir ～できる，vouloir ～したい

Je dois rester ici. 私はここにいななければならない。

#### b) <de+不定詞>：大部分の動詞

- 主動詞の主語が不定詞の主語

Il a accepté de venir. かれは来ることを承諾した。(井175)

- 主動詞の間接目的語が不定詞の主語

Je demande à chacun **de faire** un effort.

私は各人に努力することを要求する。(ハ119)

- c) <**à**+不定詞> : 若干の動詞

- 主動詞の主語が不定詞の主語

Il cherche **à travailler**. 彼は働きたがっている。(B 256)

- 主動詞の間接目的語が不定詞の主語

Il m'a appris **à jouer** au poker.

彼は私にポーカーのやり方を教えてくれた。(ロ99)

- 5) 間接目的語, 動詞の補足: à または de を伴う。

- a) <**à**+不定詞>

- 主動詞の主語が不定詞の主語

Il a consenti **à m'aider**. 彼は私を援助することに同意した。(ハ120)

- 主動詞の直接目的語が不定詞の主語

Il m'a poussé **à accepter** ce poste, il m'y a exhorté.

彼は私をこの地位を受け入れるよう勧め, 説き伏せた。(B 256)

- 代名動詞

Je ne m'attendais pas **à le voir** là.

そこで彼に会うとは思ってもみなかった。(ロ134)

- b) <**de**+不定詞>

- 主動詞の主語が不定詞の主語

Il brûle **de parler**. かれは話したくてうずうずしている。(井176)

- 主動詞の直接目的語が不定詞の主語

Jean accuse Paul **de tricher**.

ジャンはポールがいかさまをしていると言って責める。(B 306)

- 代名動詞

Je me contente **de le regarder**. 私はながめるだけにしておこう。

### 3. 1. 5 前置詞の現れ方

不定詞は多くの場合、前置詞 *de, à* に導かれる。pour, sans, par など頻度の低い前置詞はそれ自体の意味を保持していることが多いが、*de, à* は「空の」前置詞と呼ばれている。主語や属詞としての不定詞に先立つ *de* は、不定詞を導入する以外の機能を持たないし、動詞の直接目的語としての不定詞を導く *de, à* も、直接目的語が名詞ならば前置詞を介さないのだから、それ自体は意味を持たないと考えられる。ただし、目的語を強調する機能は英語、ドイツ語より強いと言われる。(LB 698) また、

*Il va falloir essayer d'apprendre à nager.*

泳ぐことを覚えようと努力しなければならない。

のように不定詞が継起する場合には、それぞれの不定詞の機能を区別する役割を持つ (B 232)。

目的語として不定詞に従える動詞は、かなり多くの場合複数の構文をとることができる。前置詞の有無、種類によって意味が異なる場合もあるが、ある程度自由な選択が許される場合もある。歴史的にもかなりの揺れが見られる。古典フランス語では、今日と比べ、*de* の頻度がずっと高く、現在 *à* を伴うものの多くは *de* をとっていたようである (LB687, 700-701)。*de* には母音衝突を起こさないと言う利点があり、文章語、地方言葉には古い用法が残っている。

つぎに、複数の構成が可能な動詞について、Grevisse, Le Bidois に基づき、いくつかの例を検討したい。(文=文章語、古=古語、地=地方の用法、話=話し言葉)

1) 普通は前置詞なしで使われるもの

- **de** をとる : adorer **de** (たまに), aimer **de** (古, 文, 地), désirer **de** (文), détester **de** (かなり多い), espérer **de** (文), préférer **de** (文)

- **à** をとる : aimer **à** (多い), faillir **à** (古)

2) 普通 **de** をとるもの

- 前置詞なし : feindre (たまに), nier (話, 現代文学), regretter (稀)

rêver (たまに, imaginer の意味で), se souvenir (se rappeler との類似により, 多い)

- **à** をとる : se dépêcher **à** (たまに), s'efforce **à** (文), feindre **à** (地), tâcher **à** (文)

3) 普通は **à** をとるもの

- **de** をとる : avoir bonne grâce **de** (古), commencer **de** (文, 非常に多い), consentir **de** (文), continuer **de** (文, 非常に多い), convier **de** (稀), engager **de** (地), exhorter **de** (古, 稀), faire attention **de** (かなり多い), habituer **de** (稀, 古), hésiter **de** (稀), réussir **de** (稀), tarder **de** (文, 非人称では必ず **de**)

以上は歴史的, 文体的な揺れの例であり, 意味上, 統語上の制約はない。なかには, 今日でもとくに書き言葉で母音衝突を避けるために, 複数の可能性からの選択が行われる動詞もある (commencer à/de, aimer à/de)。統語上の制約があっても音の条件を優先させる場合もある。demander は, 主動詞と不定詞が同一主語を持っていても de を介することがかなりあるようで, Littré によると選択は音の問題ということである (G 1330)。たしかに Grevisse の例のうち, 通常は à なのに de をとっている例は -a で終わる動詞の活用形あるいは que に<前置詞+不定詞>が続く場合のみである。

通常用法と異なるものはほとんどが古い, あるいは文学的な用法である。話し言葉 (nier), 誤用とも見なせる類推 (se souvenir) における数少ない変種が, de をとるのが原則であるにもかかわらず前置詞なしの用法がみられる例であるのは, 古く多用された de の頻度が次第に低くなりつつあることを示すのかもしれない。

次に, 意味上, 統語上の条件により, 前置詞の有無, 種類が決まる例を Grevisse にもとづいて整理してみる。(G 1328-1335)

1) 代名動詞になると前置詞が変わるもの

a) **de** が **à** に変わるもの

accorder **de** 認める → s'accorder **de** 自分に与える, s'accorder **à** (pour)



合意する, 意見が一致する。(à は文)

attendre **de** 待つ→s'attendre **à** 予期する

essayer **de** ～しようと努める→s'essayer **à** できるかどうかやってみる

refuser **de** 拒む→se refuser **à** いやがる, 同意しない, se refuser **de** 自分に禁じる, 控える

résoudre **de** 決意する→se résoudre **à** 決心する (de は古)

risquer **de** ～する恐れがある→se risquer **à** あえて～する

décider **de** ～することに決める→se décider **à** ～しようと決意する

b) 「前置詞なし」が **de** をとるようになるもの。あるいはその逆。

devoir ～しなければならない→se devoir **de** ～する義務がある

imaginer **de** ～しようと思いつく→s'imaginer ～するつもりになる

rappeler à qn **de** ～すべきことを思い出させる→se rappeler avoir fait qc ～したことを思い出す

2) 主動詞の主語と不定詞の主語が一致しないと前置詞が変わるもの。

a) 人を表す直接目的語が不定詞の主語の場合, 不定詞を導くものは **à**。

résoudre **de** (自分が) ～しようと決意する→résoudre qn **à** ～することを決心させる

décider **de** (自分が) ～することに決める→décider qn **à** ～することに決めさせる

être forcé **de** ～せざるを得ない→forcer qn **à** ～することを強いる

b) 人を表す間接目的語が不定詞の主語の場合, 不定詞を導くのは **de**

demander **à** (自分が) ～したいと言う→demander à qn **de** ～してほしいと言う

souhaiter (**de**) (自分が) ～することを望む→souhaiter à qn **de** ～してくれることを願う

dire (自分が) ～すると言う→dire à qn **de** ～するように言う

1) で, <**de**+不定詞>に従える動詞が代名動詞になると <**à**+不定詞>に従える例が多いことは注目に値する。例からみる限り, se が直接目的の場合

à をとるようである。これは2)のa)に平行する現象である。例に挙げられた動詞はどれも、自分あるいは他者に、ある方向性をもった働きかけをする意味あいを持ち、その到達点がàで示されていると考えられる。2)のb)では不定詞の主語となる主動詞の間接目的語に前置詞àの概念が含まれるため、不定詞を導く前置詞としてはàを避けると考えられそうである。

3) 意味上の条件によって前置詞が変わるもの

a) à あるいは de

● **défier qn à** ~することを挑戦する / **défier qn de** ~できるわけがないと言う

● **s'empresser de** 急いで~する / **s'empresser à** 熱心に~する (口では古)

● **manquer (de)** 危うく~する / **manquer à** (やや古) ~しそこねる、  
~し忘れる (日常語では **ne pas manquer de**)

● **s'occuper à** ~に従事する / **s'occuper de** ~に取り組む、専念する

● **prendre grade à** ~するよう注意を払う / **prendre grade de** ~しないよう  
気をつける、恐れる **prendre grade de ne pas** ~しないよう気をつける

● **trembler de** ~しないかと恐れる、心配する / **trembler à** ~して恐い思  
いをする

Je tremble **de** le voir. 私は彼に会うのではないかと恐れる。

Je tremble **à** le voir. 私は彼に会うと恐ろしい。

b) de あるいは前置詞なし

● **jurer de** (未来の行為を) 誓う / **jurer** (不定詞は過去形) (過去の行為を)  
断言する

c) à あるいは前置詞なし

● **prétendre** ~するつもり、主張する / **prétendre à** 熱望する

● **rester à** まだ~しなければならない (ことがらが主語、非人称が多い) /  
**rester (à)** ~するために残る (人が主語)

d) 前置詞なし、あるいは à, あるいは de

● **venir** ~しに来る / **venir à** たまたま~する / **venir de** ~したところだ

(近接過去)

3) の例を観察すると、前置詞の選択にはいくつかの意味上の要因がありそうに思える。まず、1), 2) に関して述べた *à* のもつ方向性という価値である。方向性は出発点との距離を前提とする。manquer *à*, prendre grade *à*, prétendre *à*, ことがらを主語とする rester *à* など、*à* は不定詞で表されることがらが実現するまでに存在する時間的な、あるいは障害による距離を示している。それに対し、manquer (de), prétendre に続く不定詞は動詞の働きかけを直後に被る対象と言える。また、s'empresser *à*, s'occuper *à*, trembler *à* の *à* は同時性を表す。これに対し s'occuper de, trembler de の de は原因を表すと考えられる。

### 3. 1. 6 特殊な構文

1) 従属節に代わる不定詞

a) 知覚動詞 voir, regarder, entendre, écouter, sentir

J'entends *parler* les enfants. 子供たちの話し声が聞こえる。(井178)

b) 使役, 放置 faire, laisser

Je laisse *jouer* les enfants. 子供を遊ばせておく。(井129)

●これらの動詞は前置詞なしで不定詞に従える。不定詞の主語は主動詞の直接目的語。

2) 疑問詞を伴って自問を表す。

Que *faire*?                      Où *aller*?

どうしたらいいだろう。      どこに行けばいいのだろう (G 1314)。

3) 感嘆, 願望, 憤慨, 驚きなどを表す。

Plutôt *mourir*! 死んだほうがました。(井178)

Et *dire* qu'on me croit faible!

私が弱いと思われているだって! (G 1314)

4) 不特定の相手に対する命令, 禁止を表す。

●公示, 諺, 料理法などに使われる。

Ne pas *fumer*. 禁煙 *Ralentir*. 徐行

*Entrer sans frapper*. ノックせずにお入りください。(B 288)

### 5) 物語の不定詞

- 物語の中で時間的關係が文脈より明らかな場合、<de+不定詞>が直説法の代わりをする。ふつう主語を伴う。

Il s'en alla passer sur le bord d'un étang :

Grenouilles aussitôt **de sauter** dans les ondes. (B 286)

彼は立ち去り、池のほとりにさしかかった

と、たちまち蛙は波間に飛び込む

### 本節(3-1)の参考文献

BONNARD, H. : *Code du français courant*, Magnard, 1982. (B)

LE BIDOIS, G. et R. : *Syntaxe du français moderne*, tome II, Picard, 1971.  
(LB)

GOUGENHEIM, G. : *Système grammatical de la langue française*, d'Artrey, 1938.

GREVISSE, M. : *Le bon usage*, Duculot, 1986. (G)

WANGER, R, et PINCHON J. : *Grammaire du français classique et moderne*, Hachette, 19.

井村順一 : 『スタンダードフランス語講座 6 文法』, 大修館, 1984. (井)

新倉俊一 他編 : 『フランス語ハンドブック』, 白水社, 1979. (ハ)

クロード・ロベルジュ 他編 : 『現代フランス前置詞活用辞典』, 大修館 1983. (前)  
『ロワイヤル仏和中辞典』, 旺文社, 1985. (ロ)

\* ( ) は本文中の略号

## 3. 2

本節を考察するに際し、大きな援助になると期待された書物が平成2年に出版された。それは、島岡茂著『英仏比較文法』(大学書林)である。しかし、一読してみると、この書物では、残念なことに、不定詞という項目は比較の対象になっていないのである。不定詞に関しては、英仏両語を比較してみる価値がないのであろうか。共有するのは「不定詞」という名のみで、実

体は全く別個のものであろうか。答えは否であると思う。語派こそ違え、同じインド・ヨーロッパ語族に属する両言語にあって、歴史的には言うまでもなく、現在の用法においても、いくつかの微妙な相違はあるものの、多くの共通点が見られることは 3.1 の説明からも明白であると思う。上の柏岡氏の論考には興味深い考察がいくつか見られる。たとえば, pour の出没が、目的の達成・不達成に関連するという指摘は、英語では完了不定詞の使用によっていることを考えると、興味深いものである。しかし、個々の事例を挙げていくと際限がないので、以下には、フランス語の不定詞の用法に鑑みて、英語の不定詞の用法にみられる顕著な特徴にしぼって論じることしたい。

### 3. 2. 1

フランス語は、さまざまな前置詞の使用により、意味を明示的に伝えるのに対し、英語の to 不定詞は、その意味解釈を文脈に依存する度合いが大きい。

例文の訳を表面的に観察しても、英語の to 不定詞には、フランス語の 4 つの表現 (pour + 不定詞, à + 不定詞, de + 不定詞, zero + 不定詞) が対応している。その他にも, par, sans などの前置詞の目的語になることができることは、柏岡氏の記述にある通りである。しかも、これらは、意味を明示的に示すための方策であって、統語的な、名詞・形容詞・副詞の用法という区分に対応しているわけではない。これに対して、英語では、次の 2 点を指摘しなければならないと思う。

(1)前置詞 + to 不定詞という形は、to が本来的には前置詞であるために、発達しなかった<sup>7)</sup>。

(2)前置詞 + 原形不定詞という、フランス語に見られる形は、原形不定詞が、現在形、命令形などとの間の屈折形式上の区別を失ったために発達しなかった。

そのために、英語では「前置詞の目的語になる」という機能は、もっぱら動名詞によって担われることになり、次の対は等価表現ということになる。

7) for to 不定詞の存在と消滅については、本稿(その一) 2.3.2 を参照されたい。

I was surprised { at hearing her objection.  
to hear her objection.

(Greenbaum and Quirk (1990) p.188)

She decided { to buy a bicycle.  
on buying a bicycle.

(*ibid.* p.349)

これらの例では, to 不定詞は, 前置詞句に相当しており, 前置詞の at や on に含まれる意味は, to 不定詞の中に covert な形で存在していると言わねばならない。

### 3. 2. 2

上に述べた特徴から引き出される corollary の1つとして, 英語の不定詞のもつ特徴を論じてみたい。Greenbaum and Quirk (1990, pp.286f.) は, 不定詞節を含む非定形節の特質として次の点を挙げている。

- 1) 非定形節は, 時制標示, 法助動詞を欠いており, しばしば主語と従属接続詞を欠いているので, 統語的圧縮の手段として価値がある。
  - 2) 書き手が, 緊密性を求めて改訂をほどこす余裕があるので, 文語散文で特に好まれる。
  - 3) 時制, 相, 法に関連した意味は文脈から復元される。
- そして, 定形節との対応に関して, 特に不定詞節のもつ特質を論じて次のように言う。

不定詞節に関しては, 対応する定形節が省略された主語の確定を可能にする。

I expected *to go*. ~ I expected that *I would go*.

I expected *him to go*. ~ I expected that *he would go*.

名詞類との指示上のきずなが, 言語的文脈の中に見つからない時, 不定の主語か話者の 'I' が推定される。

*To be an administrator* is to have the worst job in the world.

[For a person to be...]

It's hard work *to be a student* [indefinite subject, e.g. : *anyone*]

It's hard work, *to be honest*. [*I* as subject]

不定詞節の意味解釈には文脈からの情報が必要であるという上の論旨に加えて、統語上の解釈にもあいまい性が伴うことを指摘しなければならない。たとえば、上の *to be an administrator* という記号列は、*is* が後続した時と、*we* が後続した時では、その統語上の役割が全く違ってくるのである。このため、英語の *to* 不定詞には、意味解釈上、統語上のあいまい性が伴うことになり、その例は各所に指摘されている。以下にその例を挙げてみよう。

1) 不定詞の用法そのものがあいまいな場合。

The men started to drill before the truck arrived. (Kess・西光 (1989) p.127)

これは、語彙のあいまい性 (drill のもつ「穴をあける」と「練習する」の間で) の例として挙げられたものである。しかし、*start* を自動詞ととるか他動詞ととるかで *to* 不定詞の用法は変わってくると思う。

2) *to* 不定詞の主語をめぐるあいまい性。

She was too young *to date*. [‘to date others’ か ‘for others to date her’ か]

She is friendly enough *to help*. [‘for others to help her’ か ‘for her to help others’ か]

(以上2例は、Greenbaum and Quirk (1990) p.334)

I lent Paul a dollar *to get home*. [to get home の主語は I か Paul か。To get home を文頭に出せば、I が主語となる]

(Quirk *et al.* (1985) p.1108)

同様のあいまい性をもつ例を Kess・西光 (1989) から挙げる。

Dr. Vincent was the perfect man *to choose*.

John was the one *to help*.

3) 推定か事実かをめぐるあいまい性。

It is natural for them *to be together*. [‘It is natural that they should be together’ か ‘It is natural that they are together’ か] (Quirk *et al.* (1985) p. 1063)

4) 副詞類として用いられた時の、意味関係をめぐるあいまい性。

(この項の例文は、すべて Quirk *et al.* (1985) からのものであるので、ページのみを記す。)

Mary drove all the way to Maine

{ , *only to find her friends had moved to Florida.*  
{ (*only*) *to visit some friends.*

[上は ‘outcome’, 下は ‘purpose’] (p. 629)

He bought the book (*so as*) *to study metaphysics*. [‘purpose’ か ‘reason’ か] (p. 484)

You must be **STRONG** *to lift that weight*. [‘in order to lift that weight’ か, ‘because you are able to lift that weight’ か ‘if you were able to lift that weight’ か] (p. 1091)

*To be considered for admission*, you must make a formal application.  
[‘If you are to be considered’ か, ‘In order to be considered’ か]  
(p. 1091)

He’s foolish *to make such a fuss*. [reason と condition の混合] (p. 1106)

以上、to 不定詞のもつあいまい性について例を挙げてきたが、このような欠点をもつ構文が、他のライバル構文 (that 節や前置詞句) を退けて、盛んに用いられるようになってきている点に注目しなければならない。Evans and



Evans (1957) はこの点について、次のように述べている。

One of the outstanding characteristics of current English is the enormous increase in the use of the infinitive where previously an *-ing* form or a clause was preferred.<sup>8)</sup> (p. 469)

この理由については、さまざまな推測が可能であると思うが、「簡潔な表現形式を求めるという genius に合致している」という事実が最大の理由であろうと思う。

#### 4. ま と め

以上、フランス語の不定詞の用法に鑑みて、英語の *to* 不定詞のもつ特徴を考察した。「不定詞」という文法用語は、同系統の言語間においても全く同じものとは言えず、その用法や意味において変動があること、そしてそれ故にこそ、比較の対象となりうるということが分かったと思う。たゞ、本稿の比較の方法が万全とは言えないことは素直に認めなければならない。今後は、執筆者の間の論議を深めて、もっと精度の高い比較を目指したいと思う。

#### 本節 (3. 2) の参考文献

- Evans, B. and C. Evans. (1957) *A Dictionary of Contemporary American Usage*. Random House • New York.
- Greenbaum, S. and R. Quirk. (1990) *A Student's Grammar of the English Language*. Longman.
- Kess, J. F., 西光義弘 共著。(1989) *Linguistic Ambiguity in Natural Language — English and Japanese* くろしお出版
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.

---

8) 節や *-ing* 形との競争については、同書の p. 244 にも言及がある。